

特256

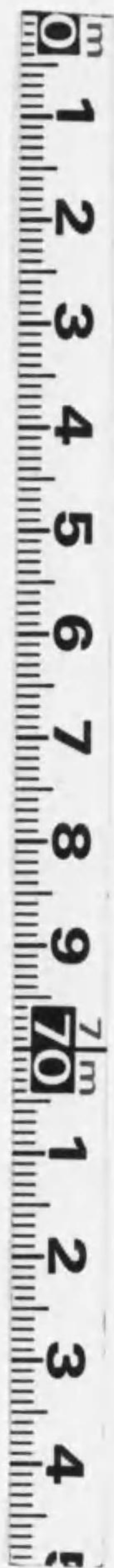
844

農林省編纂  
農民叢書  
(第42號)

実まきによる  
茶園のつくりかた



農業技術協會



始



特256  
844

目次

はしがき.....一

一 茶の適地.....三

二 茶の木のふやしかた.....四

三 實まきによい品種.....六

四 種の見分けかた.....一〇

五 種の貯藏.....一二

六 まきどき.....一四

七 土地の準備.....一五

八 まく種の量とまきかた.....一七

九 幼い茶の木の手入れ.....二〇

(附) 一 茶園の施肥標準.....二七

二 茶の栽培耕種標準.....二八

實まきによる茶園のつくりかた

はしがき

お茶は、昔からわが國民に親しまれた飲料で、日常生活に欠くことのできないものであり、また外國への輸出品としてもたいせつなものである。

お茶には、緑茶、紅茶、ウーロン茶などがあるが、わが國でできるお茶は大部分が緑茶で、日本獨特のゆかしい香りと味をもっている。緑茶には、神経を興奮させ、ねむけをさまし、つかれをいやし、仕事の能率を高める作用をもっているカフェインという成分を含んでいるばかりでなく、體の榮養を保つ上に欠くことのできないビタミンC、蛋白質、アミノ酸、無機鹽類なども相當たくさん含んでいるから、野菜の代りにもなり、われわれ國民の日々の實生活上たいせつな役目を果している。また、お茶は、わが國の輸出品としてもたいせつなもので、戦前には毎年四、〇〇〇万ポンドのお茶が海外へ

(1)

( 2 )

輸出されていた。

ところが、戦争のためその輸出がとまり、一方また、戦争中に、食糧増産の立場から、茶園が果樹園や桑園などとともに食糧作物におきかえられたり、管理が行きとどかなくなったりしたために、今日では戦前にくらべて一万町歩近くも減反し、国内の需要を充すことさえできない状態になっている。

前にも述べたように、お茶は国民生活に欠くことのできないものであり、また終戦後は食糧輸入の見返り物資や輸出品として再び重要性をもってきた。最近日本の茶業を昔のように盛んにしようという熱が全国的にたかまつてきたのはそのためで、古い歴史をもった日本茶のためまことに喜ばしいことである。この要望に應えて茶園をふやし、よいお茶をたくさんつくつて国内の需要を充すとともに、海外へどしどし輸出するように努めることは、農家の収益をたかめ、国民の生活にうるおいを興え、また日本経済の復興にも大きな貢献をすることになると思う。

この叢書は、こうした意味から、新しく茶園をつくられる農家のために、實まきによ

( 3 )

る茶園のつくりかたを説明したものであるが、ここで一言付け加えておきたいことは、新しく茶園をつくるさいには、最初近隣の人たちとよく相談し、将来一つの共同機械製茶工場を持つことができるだけの面積をまとめて始めることがたいせつである。それには直径二里ぐらいの地区内に、少くとも三町歩以上の茶園をつくる必要がある。

### 一 茶の適地

茶の木は風土に對する適應性が大きいので、大概の土地に栽培できるが、冬寒い地方にはあまり向かない。わが國では茨城縣と新潟縣が茶を経済的に栽培する北の限界になる。東北地方になると茶は非常に少く、青森縣や北海道ではもはや茶の木は育たない。

一般に、茶の木は氣候の暖かい雨の多い地方に適している。特に茶の芽ののびる春から秋にかけて雨の多い地方がよい。年平均氣温が一二度以上で、冬の最低氣温が零下一度を降らず、また年雨量が一、四〇〇ミリ以上あれば茶の栽培に適するとみてよい。

新潟その他の北陸の雪の多い地方にもかなり茶が栽培されているのは、この地方の氣候

(4)

が右の条件にかなっているからである。

土性からいうと、茶の木は根が深くのびる性質をもっているから、表土が深くて排水のよいことが最もたいせつである。一般に、山や丘の傾斜面や高原地などはたいてい茶の栽培に適し、土が常に濕っていて、地下にたまり水のあるような土地は適しない。

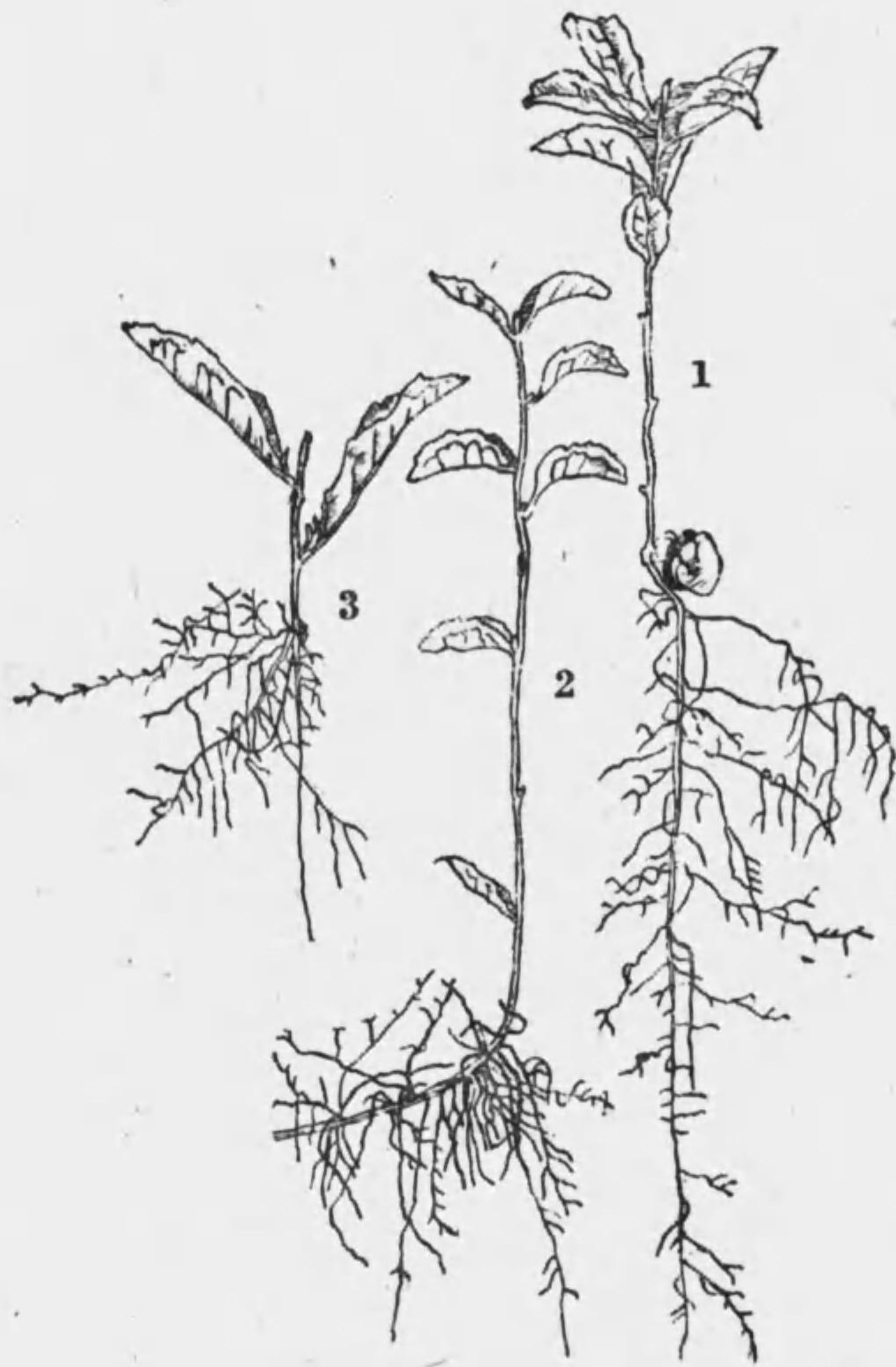
### 二 茶の木のふやしかた

茶の木のふやしかたには、實まき、さし木、取り木などの方法があるが、わが國では昔から一般に實まきでふやしている。インド、セイロン、ジャバなどの熱帯の茶の産地でもみな實まきで茶園をつくっている。

台灣では取り木でよい品種をふやすことが早くから行われ、わが國でも最近はさし木や取り木でよい品種をふやす技術が進んできたが、これらの方法は實まきのようにかんたんにはいかない。そろつたよい茶園をつくるには、理くつからいえば、さし木やとり木でふやすのが一番よいのであるが、茶の木は移植が割合にむづかしいから、さし木苗

(5)

第1圖 茶の木のふやしかた



1 實まき 2 取り木 3 さし木

(6)

や取り木苗を畑に移植して育てるには多くの勞力と費用がかかり、その上土地によっては早ばつなどのために苗を枯らす危険が多い。

實まきにするに至つて簡便に、どんな土地にも安全に茶の木を育てることができ、苗を移植する手數もいらず、また直根(命根)が深く地中にのびて發育するから、ひでりにもよくたえ、生長もはやいが、さし木や取り木の苗には直根がなくて根が浅いから、夏ひでりにあうと、それにたえる力が弱くて枯れやすい。

だから茶の木をふやすには、一般にさし木苗や取り木苗を用いるよりも、よい品種を選んで實まきにし、そのまま茶園をつくるのが一番安全で、また廣い土地にもたやすく品種のそろつた、よい茶園をつくることのできることになる。

### 三 實まきによい品種

茶の木にはいろいろの品種があるが、緑茶向きに實まきで茶園をつくるには、藪北、奈良五九號、國茶U一四號、國茶U一五號、國茶U一七號などが適していると思われ

(7)

第2圖 茶の木の品種



1 國茶 U 14 號  
2 國茶 U 15 號

3 國茶 U 17 號  
4 藪 北

る。これらの中でどの品種がよいかは、地方の風土や栽培のしかたなどによつてちがつてくるから、それぞれの地方に適したものを選んでつくりなればならない。

右の各品種の特性は次表のとおりである。

實まきに適する優良品種とその特性

品種名	特	性
藪北	中生種で樹勢が強く、樹形は直立性である。葉は大きくて長く、濃緑色でつやがあり、葉の表面にしわが多い。収量が多く、品質もよい。	
奈良五九號	晩生種で樹勢が強い。収量が多く品質もよい。樹姿は直立性で耐寒性、耐病性も強い。葉は長楕圓形で大きさは中位、色は濃緑色である。晩生であるから、一番茶が晩霜の害を受けるおそれのある地方に好適する。	
國茶U一四號	中生種で、葉の大きさは中位である。若葉は緑色でつやがあるが、夏芽は緑紅色に變る。収量も品質もともにすぐれている。	
國茶U一五號	中生種で、樹勢が強く、樹形は直立性である。葉はやや長目で、大きさは中位である。春芽は緑色であるが、夏芽は緑紅色に變る。収量も多く、品質もすぐれている。	

國茶U一七號	中生種で、樹勢が強い。耐病性がやや弱い、耐寒性は強い。葉の大きさは中位で、緑色をしており、つやがある。葉の表面にしわが多い。収量が多く、湯むし又は釜いりの玉緑茶に適している。
--------	---

農林省では、實まきで、よい品種を早く各地に普及させるため、昭和二二年度から、静岡縣金谷町、奈良市、鹿兒島縣知覽町の三カ所に國立の茶原種農場を設け、主として藪北の種とり栽培に着手している。實まきによつてよい茶園をつくるには、これらの原種農場でとれたよい種をまくとよいが、ただ今のところでは、着手して間もなく、もっぱら親木の培養に努めているから、一般に配付されるようになるのは、二―三年後になるろう。

( 9 )  
 それで、右のよい種が分けてもらえるようになるまでは、なるべく産地のはっきりしたよい種を選んでまくがよい。昔から宇治種とか、静岡種とか、狭山種とかいう地方種が賣られている。これらは品種とはいえないが、産地によつて、それぞれかなりちがっ

(10) た特徴をもっているから、それらの中から自分の土地に向き、かつ目的に合うものを選んでまくがよい。

宇治種は京都府でとられるもので、概して茶の品質がよいから、品質本位の茶園をつくるのに適している。静岡種は静岡縣でとられるもので、收量本位の茶園をつくるのに適する。また、狭山種は埼玉縣でとられるもので、比較的耐寒性が強いから、寒い地方で栽培するのに適している。

#### 四 種の見分けかた

茶の實は一〇月下旬から一月上旬にかけて成熟し、次第に皮がはじけて中の種が地に落ちる。したがって、種とりはこのころに行われる。

種の見分けかたには、いろいろの見分けかたがあるが、次にその二―三の方法を示そう。

①完全に熟した種は外皮が黒か、つ色をしていいるが、未熟のものは茶か、つ色で、

へその附近は特に色がうすい。

②新しい種は色が濃くてつやがあるが、古い種は色があせていてほとんどつやがない。

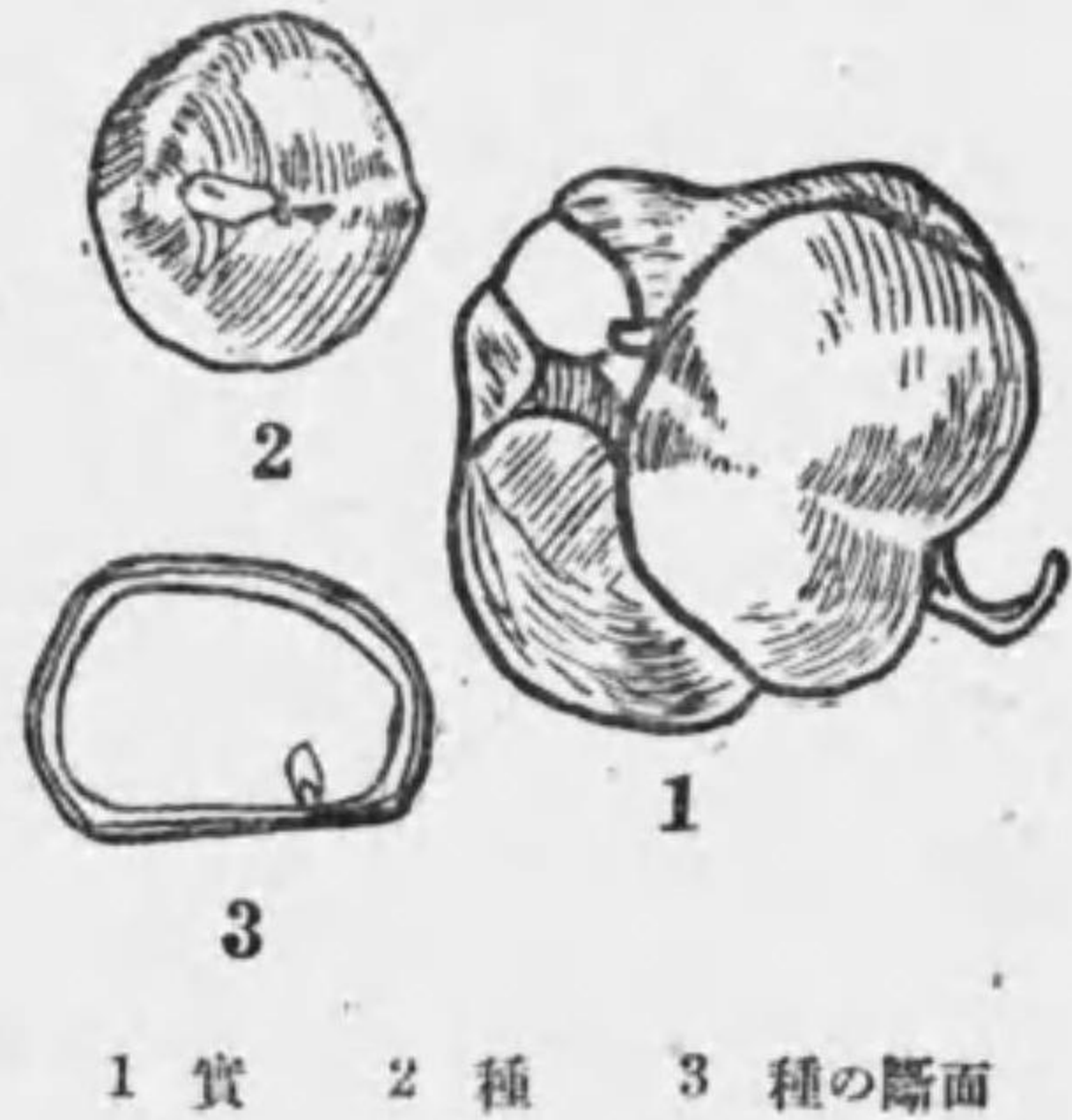
③大きい種は、小さいものにくらべて發芽後の生育がよい。山盛り一升で一、〇〇〇粒内外のものがよい。

④完全に熟した種は、とりたての新しいもので山盛り一升三三〇粒内外、乾いたもので二三〇粒ぐらいであるから、これよりひどく軽いものは、

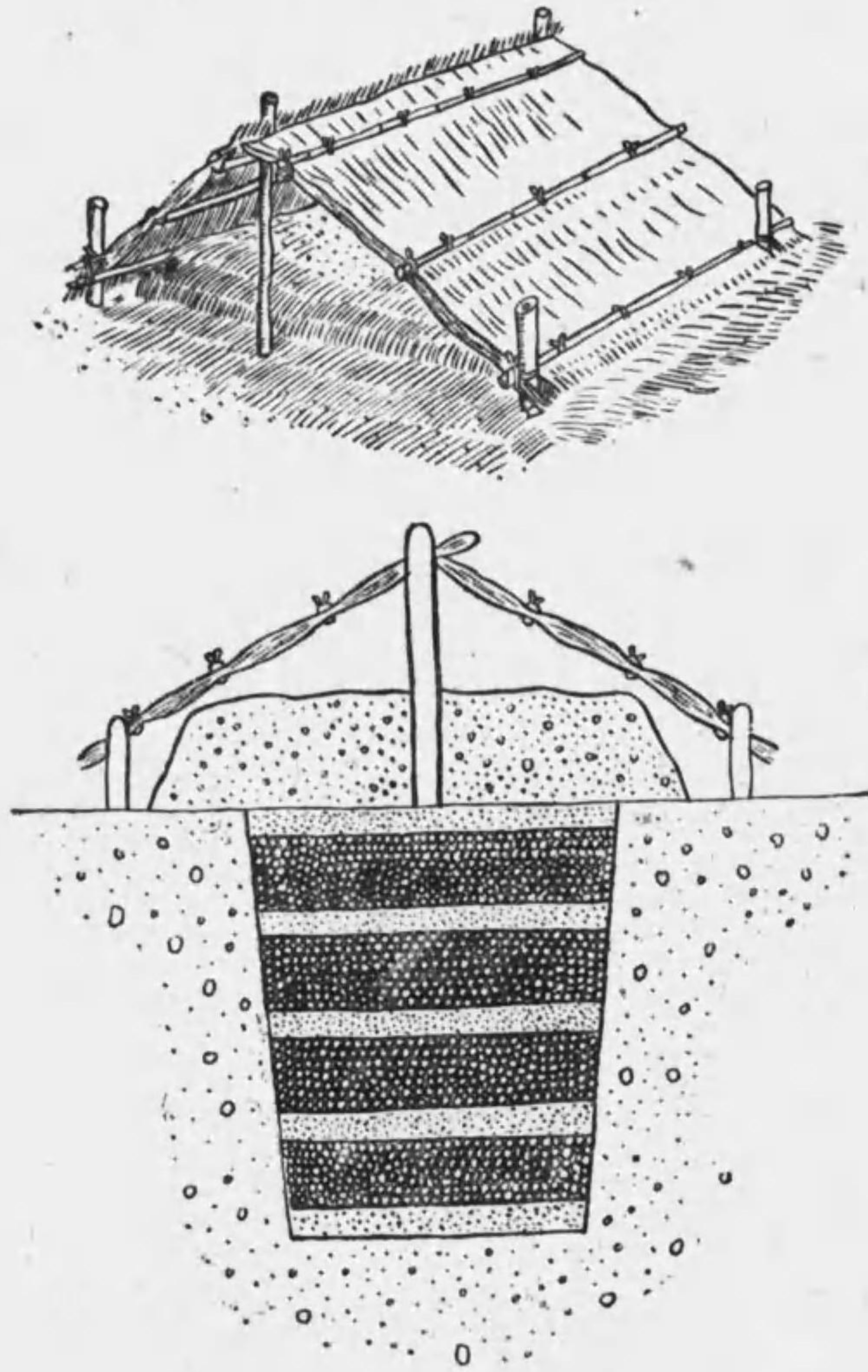
未熟のわるい種か、それがたくさんまじっているかのいずれかである。また未熟の軽い種は水につけると浮ぶから、水につけても見分けがつく。

⑤とりたての種を割ると、中に二枚の子葉が見られるが、この子葉がよく充實し、かたくしまっていて黄白色をしているものはよく成熟している種であり、子葉が軟らかく

第 3 圖 茶の實と種



第 4 圖 茶の種の貯えかた



上は地上から見たわらがこいの全景  
下は地下の断面圖、砂と種とのすきぐあいを示す

て水分が多く、白色のものは未熟の種である。乾いた種の子葉はとりたての種の子葉にくらべると小さくなっているが、この子葉があまり小さくなっているものや、軟らかくてねばりをもっているものは未熟の種である。また種の中味が變質したり、あるいはかびが生えたりしているものは、死種か、あるいは古種である。種の生死や、よく熟しているかどうかを見分けるには、このように種を割って見るのが一番確實である。

### 五種の貯藏

茶の種まきには、春まきと秋まきと二つのまきどきがある。秋まきは、とつた種をすぐにかくのであるが、春まきにする場合には、種を翌春まで貯えておかねばならない。種の貯藏は、乾かして屋内（おくら）においてもよいが、うまく貯藏するには地中に埋めてかこつておくのが一番よい。それには、屋外の乾燥した水はけのよい場所を選び、二尺か三尺の深さに穴を掘って底に細かい砂を敷き、乾いた種を四―五寸の厚さにならべ、その上にまた細かい砂を二寸くらい積み、さらにその上に種をならべて砂をおくというぐあ



(14)

いに、砂と種とをたがいちがいに積み重ねる。そして掘穴が一ばいになったならば、その上に約一尺の高さに土を盛り上げ、さらに雨おおいを施して水がはいらないようにしておく。

暖かいところでは、三月下旬になると種が発芽を始めるから、その前に取り出して、すぐにまきつけるがよい。もし、まく時期がおくれて貯蔵穴の中で発芽を始めた場合には、新芽や新根を傷めないように取り出してまきつける。そうすれば、そのまま生長を続けることができるから苗の生育もはやい。

## 六 まきどき

秋一二月ごろとつた種は、貯えかたさえよければ翌年の三月ごろまでは、いつまいても発芽力には大して變りがない。しかし、なるべく早くまく方が発芽も早く、その後の發育もよいから、暖かい地方では秋まきにするがよい。

屋内に貯蔵しておいた種は、四月になって温度が高まると次第に發芽力が衰え、五月をすぎると急に發芽力がなくなってしまふ。だから、屋内貯蔵の種を春まきにする場合には、なるべく三月中にまくのが安全である。

地中にうまく貯えておいた種は五月をすぎてもさしつかえないが、このころにはすでに發芽しているから、注意して取り出し、新しい芽や根を傷づけないように、ていねいにまきつけることがたいせつである。

冬寒い地方や、雪の多い地方では、春まきが安全である。暖かい地方でも、冬のみまを利用して土地を開墾し、新しく畑をつくってまく場合には、春まきがつうがよい。春まきにする場合には、種の貯蔵に注意し、發芽力を失わないようにすることがたいせつである。

## 七 土地の準備

(15)

新しく茶園をつくるには、まず茶の栽培に適した土地を選ばなければならない。表土が深く排水がよく、風とおしのよい台地や傾斜地が茶の栽培に適している。傾斜は、

二〇度ぐらいまでは茶の木の生育にさしつかえないが、土が雨水で洗い流されるおそれのあるところでは、二―三間ごとに土止めをするか、あるいは敷草などを充分に施してこれを防ぐ必要がある。

### (一) 開墾と地ならし

新しく山野をきり開いて茶園をつくるには、冬のひまな時を利用して雑木をきり、きり株をよく掘り起してこれを除き、できるだけ深く掘り起してよく土のかたまりをくつき、ササの根やチガヤの根、雑草、石などを充分に除き去ることが必要である。

茶の根は地中深く發育するものであるから、開墾に當つてはできるだけ深く掘り起すことがたいせつで、耕しかたが浅いと發芽後の生育がよくない。少くとも二尺以上耕すことが必要である。

### (二) うね間とうねの方向

うね間をどのくらいあけるかは、氣候や土質、それに茶の木の仕立てかたなどとらみ合せてきめなければならぬが、ふつうは五尺か六尺うねにする。土地がらのよくな

いところではややせまく、土地の肥えたところではいくぶん廣目にする必要がある。また、玉露園のように、高仕立てにする場合には、七尺以上のうね間をとることもあるが、寒い地方などで低く仕立てる場合には、四尺ぐらいのうね間にしてもよい。

うねの方向は地勢によつてきめる。平らな土地の場合には南北うねにし、茶の株がみんな日光を一樣に受けるようにする。しかし地形や風向きなどを考慮して多少は變えてもさしつかえない。また、うねはなるべく長くとる方が作業上つごうがよい。ことに畜力を利用して中耕するような場合には、うねが長いと便利である。

傾斜地では、傾斜面と直角にうねをつくる(横うね)のが原則であるが、傾斜が急な場合には、若い茶の木が雨で流されるおそれがあるから、種まきと同時に緑肥を間作するか、あるいは草や石などをおいて土止めをしなければならぬ。

## 八 まく種の量とまきかた

### (一) まく種の量

まく種の量は、氣候や種のよしあし、うね間の廣さ、まきかたなどによつてちがつてくるが、すじまきにする場合には、ふつう反當り三斗が標準である。しかし、種がよければずつと少くてよい。九割以上發芽するよい種ならば一反歩二斗以下でも足りる。

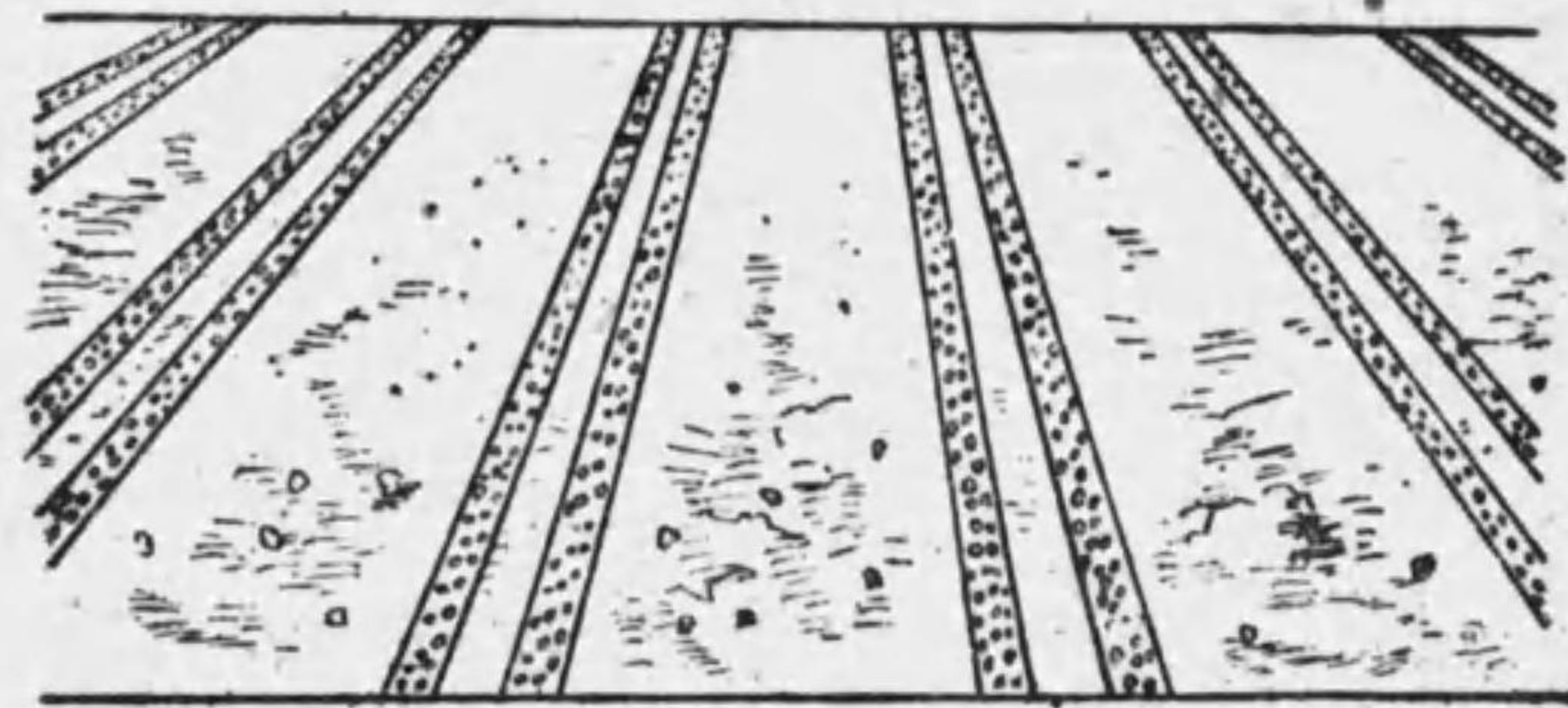
(二) まきかた

まきかたには、すじまきと株まきと二とおりある。株まきは茶の木の生育がよく、收量も多いので、茶の葉を手でつんでいたころには盛んに行われていたが、今日では、茶の葉をつむのにはさみを使うようになったから、茶つみその他の茶園の仕事に不便な株まきはすたり、一般にすじまきが行われるようになってゐる。したがつてこれから新しく茶園をつくる場合には、すじまきにするがよい。

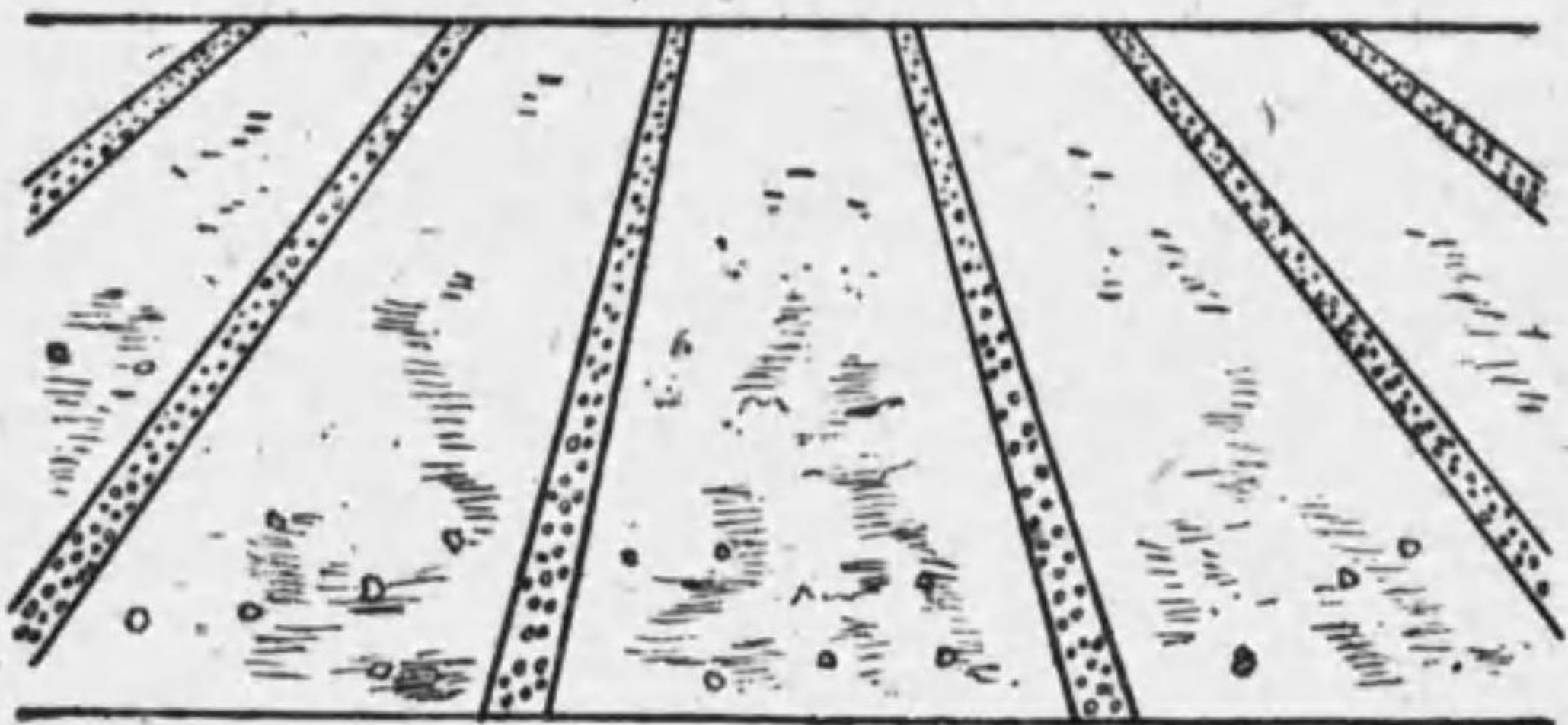
すじまきには、さらに、一すじまきと二すじまきとある。うね間が同じ幅の場合には、二すじまきの方が發芽後の成園がはやく、收量も多いが、十年もたつと結果が反對になつてくる。一すじまきは一定のうね間に一すじだけ種をまき、二すじまきの場合には一尺ぐらいの間をおいて二すじに種をまく。

第 5 圖 茶の實のまきかた

二すじまき



一すじまき



種をまくには、まず土のかたまりをよくくつき、地ならしをしてうね幅をきめる。次に、一すじまきならば、平ぐわで六寸ぐらいの幅に一すじのみぞをつくり、二すじまきの場合には八寸から一尺ぐらいの間をおいて二すじのみぞをきる。次に、このみぞに元肥もとこえとしてよく腐つたたい肥を入れ、さらに油かす類、ま

たは下肥しもごえなどを施して軽く土をかけ(註)、その上に種をまいて土をかけ、よくおさえる。種の上にかける土の厚さはうすいほど發芽が早く、生育もよいから、種が乾かないかぎり、うすい方がよい。ふつうは秋まきで一寸ぐらい、春まきで五―六分の厚さに土をかける。土をかけてよくおさえたならば、さらにその上にわら、あるいは草をかぶせ、土が飛び散つたり、乾いたりしないようにする。

註―肥料の施用量は、土地の肥瘠によつてちがうが、大體の標準を示すと、反當りたい肥二〇〇貫、油かす類二〇貫、下肥を施す場合には一〇〇貫ぐらい施せばよい。

### 九 幼い茶の木の手入れ

#### (一) 第一 年 目

發芽後の小さい苗は生活力が弱いから、注意して世話する必要がある。

種は五月から六月にかけて發芽し始めるから、苗が地上に現れないうちに敷草を兩側

に取り除けて、苗が一樣にのびるようにしてやり、同時によく草をとつておく。

六月下旬になると、苗が出そろうから、うね間を浅く耕して、うすい水肥みずごえ(下肥を一〇

倍ぐらいにうすめたもの)を反當り二〇〇貫ぐらいかけてやり、苗の發育をうながす。苗が育つためには多量の肥料が必要であるから、追肥おいてえはせひ施さなければならぬ。第二回目の追肥は七月中旬ごろに行うとよい。

幼い苗は發育が盛んで、組織がやわらかく、葉面から蒸散作用じょうさんによつて多量の水分を發散する。一方根の發達はまだ不充分で、多くは土の上層の水分を吸っているにすぎないから、七月にはいるとひでりの害を受けやすい。この時分が手入れの一番大事なときで、このころに土が乾きすぎたり、シラホシ病、タンソ病、アカハガレ病、モチ病、ウシカ、アカダニ、ハマキムシ、シヤクトリムシなどの病害虫におかされたり、肥切れがしたりすると、苗がいじけてしまう。木が一度いじけると、回復はなかなかよいでない。だから、夏には敷草を充分に敷いてひでりの害を防ぐことに努め、またてきぎに薬剤をまいて病虫害を防ぐ(註1)とともに、第二回目の追肥(註2)を施し、常に苗を盛ん

に生長させ、頂芽の發育がとまらないように心がけることがたいせつである。

註1 三一頁病蟲害防除の項を参照のこと

註2 反當りに、大豆かす三貫、菜種かす一貫、硫安一貫ぐらいを水にとかしてよく腐らしてから施す

また、苗を夏中盛んに發育させ、さらに秋芽の生長と根の發育を充分にして冬の寒さにそなえさせるため、できるだけ九月のうちに秋肥(註)を施すようにするがよい。

こうして、第一年目に本州で幹長が一尺ぐらいになるようにしたいものである。手入れが不充分だと幹長が五―六寸どまりになり、冬の寒さに耐える力が弱いからである。

註 秋肥の施用量については二七頁、茶園の施肥標準備考(3)を参照のこと

冬になると、寒い風や、雪や、氷や、霜柱などのために若い苗は枯れることが多いから、寒い地方では、秋の終りに、寒さから苗を保護する手だてをしなければならぬ。

それにはうねの北側に土寄せをして高さ一尺ぐらいの風よけ堤をつくり、山草やわらなどを根ぎわに反當り二五〇貫ぐらい敷きこみ、さらにそれが埋まるぐらいに充分土寄せを行っておけば、かなり寒い地方でも寒さの害を防ぐことができる。

### (二) 第二年目

二年目の春、新芽か出そろったならば、よく苗の特性を調べて、わるい苗を間引く。茶の木の種類は稲や麦のように遺傳的に純粹なものではないから、同じ品種の實をまいても、發芽した苗には、いろいろと形や性質のちがったものがまじって出る。だから必ず間引きを行ってよい性質の苗だけを残し、わるい苗は抜きとってしまわなければならない。間引きは大體次の要領で行う。  
まず、次の基準によつて残す苗と

第 6 圖 種まき後2年目の若い茶園



抜きとる苗とを區別し、抜きとるべき苗を間引く。

- ① 親木の特徴をそなえているもの
- ② 健全で發育の盛んなもの
- ③ 葉が大きくて將來收量の多い見込みのあるもの
- ④ 葉の色が緑色でつやのあるもの
- ⑤ 葉の形は長葉でも丸葉でもさしつかえないが、極端に長いものや丸いものは抜きとる
- ⑥ 春芽ののびる時期の早いおそいに注意し、極端に早いものやおそいものは抜きとる
- ⑦ 寒さの害や病虫害にやられて發育のよくないもの
- ⑧ 葉が極端に小さいもの
- ⑨ 葉の色が紅色、または黄色のもの

は残す

は抜きとる

間引きは、右の基準に基いて性質のよくない苗を除くとともに、苗と苗との間の距離にも注意し、枝や葉がこみ合わないよう、各苗の根元が五寸ぐらいの距離をもつよう

に間引きする。

間引き以外の手入れは、大體第一年目と同様でよい。

(三) 第三年目

三年目の春、新芽が出たなら、もう一度よく苗の性質を調べ、前の年に見落していたわるい苗がある場合には、このさい間引いてしまふ。また株間の距離にも注意し、枝や葉がこみ合わないよう五寸から一尺の距離に間引く。

木の發育がよくて、樹高が一尺五寸くらいになつたものは、三年目には葉をつむことが出来るから、一番茶をつみ、その後すぐに地上五—六寸のところから水平に第一回の剪枝(刈り込み)を行う。この剪枝面からは多數の新芽が出るが、この年には二番茶や三番茶の收穫を行わないで、もっぱら木の發育をはかる。

木の發育がおくられて、第三年目にこの第一回剪枝ができない茶園は、この年にはもっぱら肥培管理に努め、第四年目にこの作業を行う。

(四) 第四年目

四年目になれば相當の收穫があがるようになるが、この年もあまり葉をつみすぎないように注意して、茶園をつくりあげることには重きをおくがよい。

一番茶をつんだ後で、前の年の剪枝面から二寸か三寸くらい上げて平らに刈り込み、すそ枝の發育をうながすようにする。

(五) 第五年目以降

五年目になると収量も増し、はさみづみもできるようになるから、手入れのしかたも成木園(でき上った茶園)に準じて行えばよい。剪枝も、前年までは水平に刈ってすそ枝の發育をはかったのであるが、この年あたりから、上の方に丸味をもたせ、かまぼこ形に仕立てていく。

第五年目以降の剪枝は、株の中心(一番高いところ)で前の年の二―三寸上から刈り、所望の高さ(二―二・五尺)になるまでこのやりかたを続ける。こうして七―八年生で成木園になる。

(附) 一 茶園の施肥標準

(生葉収量二五〇貫の成木園一反歩當りの肥料標準)

農林省茶業試験場

肥料の種類	秋肥	春肥	夏肥	計
	(九月中旬)	(三月上旬)	(六月上旬)	
大豆	二〇貫	一〇貫	一〇貫	四〇貫
茶種	五	六	六	一七
硫酸	一〇	一	一	一〇
過りん酸石灰	六	五	五	一六
硫酸カリ	三	一	一	三

備考

- (1) 三要素量は、窒素七貫〇一六匁、りん酸三貫五三二匁、カリ二貫四七九匁となる。
- (2) この外に敷草を反當り二五〇貫施す。
- (3) 若い茶の木では、第一年目の夏までは主としてうすい水肥を施し、秋肥としては成木園の秋肥の三分の一を施す。第二年目は、春、夏、秋肥とも成木園の二分の一、第三年目は、同じく、三分の二を施す。四年、あるいは五年目から成木園と同じ量を施す。

(4) 施肥のしかたは次のようにする。

春肥 三月上旬にまずうね間を五―六寸の深さに耕し、次いで枝張りの下に五―六寸のみぞを掘り、その中に肥料を入れて埋める。

夏肥 一番茶をつんだ後、うね間を五―六寸の深さに耕してから、春肥と同じようにして施す。

秋肥 九月中旬にうね間を一―二尺の深さに深く打起し、次いで前と同様に枝張りの下に五―六寸のみぞを掘り、その中に施して埋める。

敷草 秋、山草を刈つて、元肥が終つてから、うね間に施し、根ざわを保護する。

(附) 二 茶の栽培耕種標準

農林省茶業試験場

耕作及び施肥

土を軟らかにして古根を切り、新しい根を発生させて養分の吸収をよいにさせるため、一年に三―四回うね間を耕す。

すなわち、九月上中旬に一尺ぐらゐの深さに深く耕して元肥を施し、三月上旬及び一番茶または二番茶をつんだ後に、除草をかねて深さ四―五寸内外に浅く耕し、それぞれ春肥や夏肥を施す。

除草

耕作と同時に進行するか、草のはえぐあひを見て随時行う。茶の木が幼いうちは、雑草に負けやすい

から、特に注意して行う。

仕立法

茶の木を仕立てる高さや形は、収量・品質・茶をつむ能率などに、大きな影響を及ぼすから、うね間の廣さや氣候・土質などと考え合せて、適當にきめる。ふつうの茶園では、高さ二尺ないし二尺五寸ぐらゐ、株の幅を五尺ぐらゐとし、すそ張りのよいかまぼこ型に仕立てるのが標準である。ただし、北陸地方のように、雪の多いところでは、一尺ぐらゐの高さに、低く仕立てる必要がある。

剪枝 (刈込み)

刈込みは、主幹の勢力をおさえてわき枝やすそ枝の發育を促すとともに、樹形を整え、廣い摘採面をつくつて芽の出を多くし、葉の収量を増すとともに葉の品質をそろえ、茶つみの能率を高めるために行うものである。だから成木園でも毎年行う。

刈込みの時期は、ふつう一番茶をつんだ後(五月下旬)か、二番茶をつんだ後(七月中旬)がよい。

刈込みは、その深さによって次のように分けられる。

(1) 浅刈り 前の年に刈込んだところから、およそ一寸ぐらゐ上の方を刈る。



- (ロ) 深刈り ほとんど古葉が残らない程度に刈込む。
- (ハ) 中刈り 深刈りよりも、さらに深く刈込む。
- (ニ) 台刈り 株元から刈り取る。

浅刈りは、毎年一回一番茶をつんだ後か、二番茶をつんだ後に行う。深刈りは四―五年目に一回行う。中刈り、または台刈りは、木を更新させるために行うもので、樹勢が衰えた場合に行うものである。

摘採 (茶つみ)

茶の葉をつみとる回数、各地の気候や、茶園の経営の仕方などによってちがってくるが、三回がふつうである。

一番茶は五月中旬に、二番茶は一番茶をつんだ後四〇日ぐらいたった七月上旬に、三番茶は二番茶をつんでから三〇日ぐらいいいて八月中下旬に行う。もし四番茶をつむ場合には、十月上旬につむ。つみ方には手づみとはさみづみとあるが、今では、一般にははさみづみが行われている。

はさみづみをするには、茶園を高さ二尺三寸ぐらいのかまぼこ型のうねに仕立てて刈込みをていねいに、常に茶株面を整えておく必要がある。また、秋に徒長枝を刈込み、摘採面をそろえておく

こともたいせつである。はさみづみの場合には、時期をあやまらないことと、深づみにならないようにすることがたいせつである。

病蟲害の防除

防除の時期	茶株の状態	使用薬剤	同上調合量	薬をまく回数	病害蟲の種類
二月下旬から 三月上旬まで	發芽前	石灰硫黄合劑 液體ソーダ合劑 または 粉末ソーダ合劑	水一斗に對し 六〇―一六〇匁 水一斗に對し 六〇―一八〇匁	一回	カイガラムシ ハマキムシ、ミ ノムシ、チヤド クガ、カイガラ ムシ
三月中下旬	發芽前	手で、と、る、			
三月下旬	發芽直前	石灰ボルドー液 または 銅製劑二號液	硫酸銅 一―二〇匁 石灰 六〇―一 二〇匁 水 六斗 銅製劑二號 一―一五匁 油脂展着劑 一―五匁 水 一斗	一回	シラホシ病 タンソ病 マルアカホシ病
三月下旬から 四月上旬まで	發芽の二期 (摘採の二〇日前 ―二五日前)	右に同じ	右に同じ	一回	モチ病、シラホ シ病、アカハガ レ病、タンソ病

五月下旬から 六月上旬まで	一番茶をつん だ後	石灰ボルドー液 または 銅製剤二號液	六〇—八〇倍	一	アカハガレ病、 タンソ病、シラ ホシ病、モチ 病、マルアカホ シ病
五月上旬から 七月下旬まで	一番茶をつん だ後	デリス乳劑 六〇〇倍液	水 石けん デリス 一五八 斗	二—三	ハマキムシ、シ ヤクトリムシ
七月上旬	二番茶をつむ 前	除蟲菊乳劑三 一、五〇〇倍液 または 一〇〇〇倍液	除蟲菊乳劑三 〇七五 斗	三—四	チャドクガ
六月下旬から 七月中旬まで	二番茶をつむ 前	除蟲菊乳劑三 一〇〇〇倍液 または デリス乳劑 四〇〇倍液	水 石けん デリス 四〇二 斗	—	レイシムシ
七月中旬から 七月下旬まで	三番茶をつむ 二〇—二五日 前	石灰ボルドー液 または 銅製剤二號液	水 銅製剤二號 一五五 斗	—	アカハガレ病、 シラホシ病、タ ンソ病

七月下旬から 八月下旬まで	二番茶をつん だ直後	石灰硫黄合劑	六〇—八〇倍液	一	アカダニ
八月中旬から 八月下旬まで	三番茶をつむ 前	除蟲菊乳劑三 一五〇〇倍液 または デリス乳劑 六〇〇倍液	水 石けん デリス 二〇八 斗	二—三	チャノウンカ、 ハマキムシ、シ ヤクトリムシ、 チャドクガ
九月下旬から 一〇月上旬まで	三番茶をつん だ後	除蟲菊乳劑三 一〇〇〇倍液 または デリス乳劑 四〇〇倍液	水 石けん デリス 四〇二 斗	一—三	レイシムシ
九月下旬から 一〇月下旬まで	三番茶をつん だ後	石灰ボルドー液 または 銅製剤二號	水 銅製剤二號 一五五 斗	—	モチ病、シラホ シ病、タンソ 病、マルアカホ シ病

注意 薬をまく量は一反歩當り六斗

執筆 者 志 村 喬

(農學博士・農林技官・農林省茶業試驗場勤務)

- 第一號 麥の芽出し播き
- 第二號 雪國の麥
- 第三號 移植麥の苗の作り方と植え方
- 第四號 農地制度改革の話
- 第五號 種根の消毒
- 第六號 米の消蟲
- 第七號 麥の中耕と土入れ
- 第八號 大豆の食べかた
- 第九號 農用役牛の扱い方
- 第一〇號 麥踏み
- 第一一號 螢光誘蛾燈
- 第一二號 麥には石灰窒素をどう使うか
- 第一三號 さつまいもの新品種
- 第一四號 イネドロオイムシの防ぎ方
- 第一五號 人力用噴霧機とその使い方
- 第一六號 乳牛の選び方
- 第一七號 稻の病氣の見分け方
- 第一八號 桑の肥料
- 第一九號 魚の干物
- 第二〇號 馬鈴薯の害虫テントウムシダマシの防ぎ方
- 第二一號 サツマイモのコクハン病の防ぎ方

- 第二二號 麥とりん酸
- 第二三號 青刈大豆その作り方と施し方
- 第二四號 稻一丈夫な苗
- 第二五號 酸性土壌と石灰
- 第二六號 馬鈴薯の疫病とその防ぎかた
- 第二七號 大豆の種とり
- 第二八號 三化メイチュウの防ぎ方
- 第二九號 イネゴマハガレ病の防ぎ方
- 第三〇號 米ぬかの搾油
- 第三一號 さつまいもと大豆の混作
- 第三二號 大豆の害虫ヒメコガネの防ぎ方
- 第三三號 桑開枯病の防ぎ方
- 第三四號 稻の冷害
- 第三五號 トウモロコシの作り方
- 第三六號 動力耕耘機とその使い方
- 第三七號 農村工業の話
- 第三八號 ビタミンの話
- 第三九號 茶養の知識
- 第四〇號 稻—保温折衷苗代
- 第四一號 切り干しいもの作り方
- 第四二號 實まきによる茶園のつくりかた

昭和二十四年三月十五日 印刷

非賣品

農民叢書第42號  
實まきによる茶園のつくりかた



(禁無断轉載)

發行所

東京都北區西ヶ原町  
三十三番地

農業技術協會

電話 胸込(八二)〇二七五番  
王子(八一)三七八七番

編集者

東京都千代田區有樂町一丁目七番地  
農林省農業改良局

發行者

農業技術協會

代表者 森 肆 郎

印刷者

東京都北區上中里町百五十三番地  
倉 澤 直 男

印刷所

東京都北區上中里町百五十三番地  
合名 双文社印刷所

終

